研究　２

「読むこと」「書くこと」が苦手な子どもの英語指導

～４つの技能を取り入れた短時間学習の効果的な活用～

研修員　　小林　美賀

目　　次

Ⅰ　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

Ⅱ　研究の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
　１　研究の動機
　２　研究の目的
　３　研究の対象及び方法
　４　研究の内容
　（１）短時間学習の指導
　（２）短時間学習での指導をより効果的にする取組

Ⅲ　研究の実際－短時間学習での授業実践－　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
　１　ジョリーフォニックスについて
　２　LD 児の指導（ヒッキ―の多感覚学習法）について
　３　復習、定着のための指導について

Ⅳ　研究の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
　１　生徒の学習状況から
　２　アンケート調査から
　（１）フォニックスの学習について
　（２）フォニックスに関わる音とつづりのチェック

Ⅴ　研究のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

Ⅵ　引用・参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

Ⅶ　資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

Ⅰ　はじめに

小学校では、平成 32 年度からの新学習指導要領の全面実施で、中学年で外国語活動が領域として、高学年で外国語が教科として扱われる。教科化により、小学５、６年生でも「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表)」「書くこと」の４技能５領域が扱われる。現行の指導内容に「読むこと」「書くこと」が加わるため、小学校中学年から、アルファベットの文字指導を行い、４年間でアルファベットの文字の形と名前読み・音読みを指導することになる。

また、小学校で扱われる語彙数は「600～700 程度の語」、中学校では「小学校で学習した語に 1600～1800 程度の新語を加えた語」となり、子どもたちは中学校卒業までに最大 2500 程度の語を学ぶことになる。現行の学習指導要領で扱う語数は、「1200 程度の語」で、今までの２倍程度の語彙の習得が求められる。

一方、「中高の英語指導に関する実態調査 2015(ベネッセ)」によると、中学校英語教員対象の質問項目の中で、生徒が英語学習において苦手意識やつまずきを感じる原因は、「単語（発音・綴り・意味）を覚えるのが苦手」が 60.9％と最も高くなっている。また、「文字や文章を読めない（文字から音にうまく変換できない）」も 43.1％あった。新学習指導要領において、一気に語彙数が増えることによって「読むこと」「書くこと」に苦手意識を持つ子どもに大きな負担がかかることと考えられる。

Ⅱ　研究の概要

１　研究の動機

小学校の外国語活動で英語の音声に慣れ親しんできている子どもが中学校で英語を学ぶようになって、文字が入ってくることで苦手意識が大きくなることがある。また、中学校で英語を指導していると、単語を覚えることが難しい生徒は、英語で書かれた文字や文を記号の配列のようにしか見ることができず、意味のある語や文として捉えられなかったり、アルファベットの小文字の「ｂ」と「ｄ」や「ｐ」と「ｑ」をいつまでも書き間違えたりすることがある。このように、英語を音声から文字へ円滑に接続できない理由として、日本語と英語の文字と音との関係が大きく異なっているということが挙げられる。

学習障がい（LD）の１つでディスレクシア（読み書きの学習障がい）の子どもの出現率は、加藤（2016. pp. 32-33）によると、「英国３～10％（スノウイング、2000 年）、米国５～17.5％（シェイウィッツ、1998 年）で、ドイツ５％（1997 年）、イタリア１％（1969 年）と報告されており、英語圏で圧倒的に頻度が高く」なっている。これは、英語が他の言語より、ディスレクシアの出現率が高いということを示している。また、加藤（2016. p. 32）は日本語による出現率について、「宇野ら（2004 年）は、ひらがな１％、カタカナ２～３％、漢字５～６％と使う文字によって頻度の違いがあることを報告」している。最もディスレクシアの出やすい漢字でも５～６％であることから日本語より英語の方が読み書きの難しい言語であると考えられる。

英語圏の子どもたちは、小学校入学前から小学校低学年にかけて丁寧に段階を踏んで読み書きを学ぶことからも、日本語を母語とする中学生が第２言語として英語を学ぶ時、LD（特にディスレクシア）の疑いのある子どもにとって、英語の読み書きの難し

さは英語学習の大きな壁になっていることが分かる。

小学校の外国語活動が始まってから、中学１年生でのアルファベット指導は、それ以前より短い時数で教えるようになった。短い時数の中で、大文字・小文字、順序、名前読み、音読みを指導するが、英語が苦手な子どもにとって、実際の「読み」「書き」につながる英語の文字と音の関係を短期間で身に付けることは難しいと考える。

英語の読み書きの難しさは、次の３つであるとジョリーフォニックストレーナーの山下（2017 夏）は挙げている。

- 文字と音が「１対１」とは限らない。
- １つの文字がいくつもの読み方に変わるものがある。
- １つの音に対して、いくつものつづり方があるものがある。

そこで、英語の文字と音の関係について、小学校１年生でひらがなを学ぶように段階を踏んで学び、文字と音を一致させることで、英語の「読むこと」「書くこと」の苦手意識を減らすことができると考えた。また、中学校入門期に、日本語と英語の違いを十分考慮した文字と音の関係をより丁寧に指導するために、短時間学習を活用したいと考えた。

２　研究の目的

本研究では、フォニックスの学習を中心とした取組を通して、英語の文字と音を一致させ、音素・音韻認識を高めることによって、単語や英語の文が読める、書けるという喜びを実感し、英語を学びたいという意欲を高める指導について知見を得ることを目的とする。

具体的には、「聞く」「読む」「話す」「書く」など「多感覚」を用いた、より効果的な短時間学習の指導方法について研究する。

３　研究の対象及び方法

・協力校と対象学年　市内中学校１年生　４クラス（118 名）
・実施期間　2017 年　９月　アンケート調査（事前）
　　９月～12 月　授業実践
　　12 月　アンケート調査（事後）

４　研究の内容

（１）短時間学習の指導

文字と音の指導を、授業の始めの短時間学習で行う。

〇英語の授業の最初の 10 分程度で行う。
〇ジョリーフォニックスの基本の 42 音を、1 回の授業で２音ずつ導入する。
〇フォニックスの基本の 42 音を、７つのグループに分け、各グループが終わったところで復習を行う。
〇短時間学習では１年生４クラスを２つに分け、２クラスはジョリーフォニックス、２クラスは手がかり単語カード（LD の英語学習）を使った学習を中心に行う。

① ジョリーフォニックス

フォニックスの定義は、鄭（2015.p.173）によると、「フォニックスとは英語でphonicsと書き、phone（音）と ics（学問）を合わせた言葉で『音と文字の関係性』をまとめたもの」であり、「フォニックス指導とは、本来、英語を母国語とする子どもにリーディングを教えるための指導法で、文字とそれがあらわす音の結びつきを教え、そこから単語・文の読みにつなげていく」というものである。英語を母語とする子どもは生まれた時から英語のシャワーを浴びており、英語の音を聞き分けることができ、意味も含めた言葉をたくさん知っている状態でフォニックス指導を受ける。

フォニックスの指導法の中で、アナリティックフォニックスは既知の単語を分解して、音とつづりの関係を学ぶ指導法である。既知の単語からつづりの音を学ぶアナリティックフォニックスに対して、シンセティックフォニックスはつづりの音を学び、習った文字を使って音を合成し、単語を読んでいくため、単語を知らなくても読むことができるようになる（図１）。シンセティックフォニックスは、英語を母国語とせず、第２外国語として学ぶ子どもたちにとって学びやすく、初めての単語でも「読める」という喜びを実感できると考える。

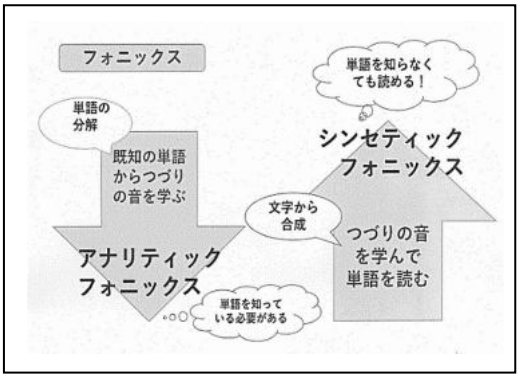


図１　２つのフォニックス
（山下,2017 夏資料より）

イギリスのスー・ロイドが考案したジョリーフォニックスは、シンセティックフォニックスの１つで、まず基本の 42 音で文字と音の関係を学習する。アルファベット 26 文字と「ai,or,ou,th,oo」などの２文字で一つの音を表すダイグラフを含む 42 音を７つのグループに分け、順に教えていく（表１）。ダイグラフは、第４グループから教えられる。また、学ぶ文字と音の順は、アルファベット順ではなく、単語の作りやすさの順で教えられ、学んだ文字（音）を使って、早い段階から単語を読んだり、書いたりすることができる。

表１　ジョリーフォニックスの「文字の音」の指導順とグループ

グループ１	Ss,　Aa,　Tt,　Ii,　Pp,　Nn
グループ２	Cc Kk,　Ee,　Hh,　Rr,　Mm,　Dd
グループ３	Gg,　Oo,　Uu,　Ll,　Ff,　Bb
グループ４	ai,　Jj,　oa,　ie,　ee,　or
グループ５	Zz,　Ww ,　ng,　Vv,（短い）oo,（長い）oo
グループ６	Yy,　Xx,　ch,　sh,（有声音の）th,（無声音の） th
グループ７	Qu qu,　ou,　oi,　ue,　er,　ar

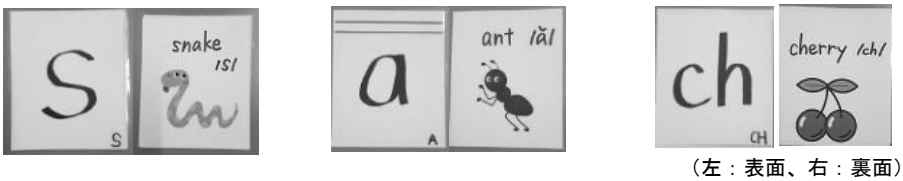
また、ジョリーフォニックスでは、１文字の音の指導の手順が次のように決まっている。

①音の復習　②お話　③アクション　④文字指導　⑤音の聞き取り ⑥ブレンディング（読み）　⑦ディクテーション　⑧歌

本研究では、１回に２音ずつ導入し、「音の復習→お話→アクション→音の聞き取り→歌」という流れで指導する。

② LD 児の英語指導（ヒッキ―の多感覚学習法）

「ヒッキ―の多感覚学習法」は、イギリスでキャサリーン・ヒッキーによって考案された、LD 児、特にディスレクシア（読み書き障がい）の子どもに対する英語の読み書きの指導方法である。音と文字の指導を「聴く」「見る」「言う」「書く」の多感覚を用いて行い、「子どもたちに、文字の名前－音－形、文字の正しい順序に関する自動的な反応を永久的に獲得させること」を学習の目的としている（コームリー、2005. p. 40）。１文字の音の指導は、「文字を見る→文字指導→その文字（音）を含む手がかりとなる単語とともに、その文字の音を聞く→手がかり単語とともにその文字の音を言う」という手順で行う。また、文字と音を定着させるために、読みカード（本研究では、「手がかり単語カード」と呼ぶ）を用いる。手がかり単語カードは表面に文字（中央に小文字、右下に大文字、母音のカードの上部には２重線）が、裏面に音、手がかり単語のつづりと絵が書いてある（図２）。



（左：表面、右：裏面）

図２　手がかり単語カードの例（ s, a, ch ）

この学習法は、学習する文字（音）の順序はジョリーフォニックスとは異なるが、使用頻度の高い順になっており、学習した文字（音）を組み合わせて早い段階から単語を作ることができる。

ジョリーフォニックスや LD 児の英語指導は、多感覚を刺激して、文字と音を身に付けていくものである。子どもによって身に付きやすい活動はさまざまであると考え、本研究では、1 年生の４クラスのうち２クラスは、ジョリーフォニックスの手法を用いて、２クラスは LD 児の英語指導（ヒッキ―の多感覚学習法）の手法を用いて、ジョリーフォニックスの基本の 42 音を順に指導する。

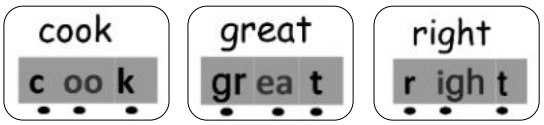
（２）短時間学習での指導をより効果的にする取組

文字と音の指導を短時間学習で行うが、短時間学習以外の授業の場面でも文字と音の関係を意識させ、生徒の読む力・書く力を向上させる効果を狙い、教科担任と協力して、①新出単語の学習における音韻意識指導と②単語練習プリントを使った指導に取り組む。また、短時間学習は一斉指導になるため、英語の読み書きが苦手な生徒にとっては、音の定着やブレンディング（読み）練習が不十分であることが考えられる。そこで、短時間学習での指導をより効果的に定着させるため、③個別の補充学習を行う。

① 新出単語の学習

文字と音の関係を意識させるため、教科書のパートごとの新出単語の学習で、単語を見ながらCDで発音練習をした後、大型テレビを利用し、音を分解してつなげる練習を行う。次のように、教師がモデルを言った後リピート練習をする。

cook	/k/,/u/,/k/ ,cook
great	/gr/,/ei/,/t/ great
right	/r/,/ai/,/t/ right



NEW HORIZON English Course 1(2016.p.60) 新出単語より

③ 単語練習プリント

単語練習プリントは家庭学習として使う。英語の音に意識が向けられるように、なぞり書きの部分を、単語を音に分けたものとかたまりの２段階にする（**Ⅶ資料**）。また、書くことに抵抗感がある生徒のために、書くのは１語につき３回ずつにする。読みの難しい生徒のために、カタカナで振り仮名をつける。そして、必ず声に出して読んでから書く練習を行うように指導する。

新出単語の学習と単語練習プリントについては、生徒の音韻意識をより高めるために取り組ませる。授業の始めの短時間学習でフォニックスのルール（文字と音の関係）を順に学んでいくが、教科書の新出単語や英文を読む時、ほとんどが未習のルールのため、個々の生徒がフォニックスを意識して読むことが難しいと考える。既習の文字と音だけでなく、まだ学んでいない文字と音も、フォニックスのルールを意識しながら、音素に分解して読む練習や書く練習をすることで、生徒の音韻意識を高め、読む力・書く力につなげることができると考える。

④ 個別の補充学習

一斉授業の短時間学習で補いにくい、読みの練習を中心に行う。授業時間内の短時間学習は１つ１つの文字と音の学習が中心となるため、基本の42音の定着と、単語や文の読み（ブレンディング）・書き（セグメンティング）の練習という２つの目的で行う。手がかり単語カードの読み練習と、基本の42音のグループごとに準備したフリップカードを使った読み・書き練習を中心に行う。

個別の補充学習は、昼休みの15分を利用して行う。参加は基本的に希望による自由参加とすることを生徒に知らせておく。さらに、授業での観察や教科担任と相談の上、個別指導が必要な生徒には個別に声かけをする。

補充学習で使う教材

ア　手がかり単語カード(P37.図２)

短時間学習でも使うカードで、定着を図るために補充学習の始めに必ず行う。学習するたびに枚数が増えていき、最終的に基本の42音のカードになる。表面を見ながら、「/s/,snake,/s/」、「/a/,ant,/a/」・・・と読ませる。カードは学習した順に並べ、読み練習する。

イ　フリップカード（P39.図３）

上部には絵が、下部には音に分けて文字が書いてある。絵をヒントにしながら、音を確認して読んでいく。慣れてきたら、絵を隠して文字のみで読む練習をする。

基本の 42 音のグループごとに、15 枚程度のセットになっている。

ウ　読みカード（図４）

基本の 42 音のグループ別に、単語が一覧になったカード。意味のある単語だけでなく、意味のない単語（エイリアンワード）カードも準備する。

図３　フリップカード（山下, 2017 夏より）

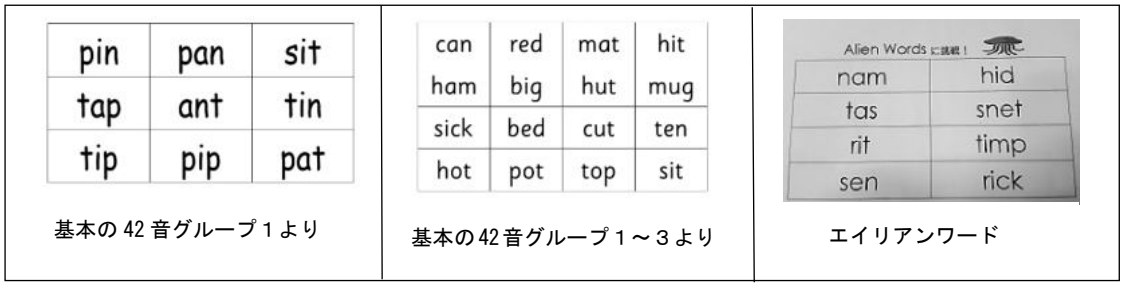


図４　読みカード

エ　絵本（Picture books）

習った文字と音で、実際に初めての英文が読める（読めた）という感覚をもたせたい。そのため、初級レベルの絵本を用いた読み練習を取り入れる。

Ⅲ　研究の実際－短時間学習での授業実践－

１　ジョリーフォニックスについて

１回の指導の流れは、①音の復習　②お話　③アクションと音の確認　④音の聞き取り　⑤歌　である。A 組、D 組の２クラスで行った。

１回に２つずつ導入するため②～④を繰り返し行い、最後に歌で音を聞き取り、確認をする。

指導の流れ（10 分程度）

	学習活動	指導の留意点	使用教材
1	音の復習	既習の音を手がかり単語カードで復習する。	手がかり単語カード（大）
2	お話	絵本の中のその音を使った単語を使いながら、その音と話が印象に残るように話す。	絵本 Power Point
3	アクションと音の確認	お話に合ったアクションの確認。口の形や有声音、無声音などの説明を加え、カタカナの発音にならないように注意して指導する。	文字カード
4	音の聞き取り	その音が単語の中のどの部分で聞かれるか注意して聞いた後、声に出して確認する。 ２～４を繰り返し、２つの文字と音を指導する。	絵カード Power Point

5	歌（ジョリーソング）	文字の音に注意して聞く。 音が聞こえたら、アクションをしながら歌に合わせて発音する。	CD

2　LD 児の英語指導（ヒッキ―の多感覚学習法）について

１回の指導の流れは　①音の復習　②文字と音の確認　③音の聞き取り　④手がかり単語と音の確認　⑤手がかり単語カード読み練習（ペア活動）である。B 組、C 組で行った。

指導の流れ（10 分程度）

	学習活動	留意点	使用教材
1	音の復習	既習の音を手がかり単語カードで復習する。	手がかり単語カード（大）
2	文字と音の確認	口の形や有声音、無声音などの説明をし、カタカナの発音にならないように注意して指導する。	文字カード Power Point
3	音の聞き取り	その音が単語の中のどの部分で聞かれるか注意して聞いた後、声に出して確認する。	絵カード Power Point
4	手がかり単語の確認	新しい文字の手がかり単語を Power Point で確認し、練習する。 ２～４を繰り返し、２つの文字と音を指導する。	手がかり単語カード（大） Power Point
5	手がかり単語カード読み練習	目安の目標タイムを確認し、相互に読み練習を行う。（ペア活動）	手がかり単語カード（小）、タイマー

3　復習、定着のための指導について

各グループの文字と音の学習を終える毎に、短時間学習で次のような指導を取り入れた。この指導は４クラス共通で行った。

（１）手がかり単語カード練習（ペア活動）

ペア活動で繰り返し行うことで、文字と音の関係の定着を図るとともに、お互いに聞き合うことで、正しく覚えられているかチェックできた。リズムよく言うことで、自然に覚えていけるように、カードの順は必ず学んだ順になるようにした。また、音や手がかり単語を忘れた時には、カードをめくる人は、相手が思い出すのを待つのではなく、手がかり単語がある裏面を見せるように促した。目標タイムを設定することで、意欲的に取り組めた。

（２）書き取り練習（２文字、３文字、４文字の単語）

既習の音を使った単語の書き取り練習を行った。はじめに単語を２回繰り返した後、音素に分解して２回繰り返し聞き、書き取った。（例えば「sat、sat、/s//a//t/、/s//a//t/」など）

（３）似た音の聞き取り練習（「a」と「u」、「l」と「r」）

音の違いを確認した後、それぞれの音を含む単語の聞き取りを行った。

（４）オンセット・ライム指導

３文字の単語をオンセット(母音の前の子音)とライム（母音とその後の子音）に分ける練習とライムが同じでオンセットのみを変えていく練習を行った。（例えば、s-at、 p-at、 m-at など）

（５）エイリアンワードの読み練習

既習の文字（音）を使った意味のない単語をペアで読む練習した。

（６）母音の指導（短母音と長母音）と「マジック-e」の指導

短母音の音と長母音の音（アルファベットの名前読みであること）の復習をした。また、「最後に-e がつくと、２文字前の母音が名前読みに変わる」という「マジック-e」のフォニックスルールを理解させ、「mat（マット)」➔「mate（メイト)」など、３文字の単語に「e」を付け足して、短母音を長母音に変える読み練習した(P43.図７)。

Ⅳ　研究の結果

１　生徒の学習状況から

（１）ジョリーフォニックス

ジョリーフォニックスのお話と歌は２クラスのみの活動であった。お話について、子どもたちは毎回大型テレビに映し出した絵本を手がかりに集中して聞くことができていた。お話の絵本の中には学習する文字と音に関連する語がたくさん使われており、音とアクションが分かりやすく、印象深く覚えられるようになっていて、ストーリーやその中に出てくるアクションと音を関連付けて覚えることができた。音を発音しながらアクションを一緒にするなど、多くの生徒が興味をもって文字と音の関係を学ぶことができた。

音の確認のために最後に聞く歌は、マザーグースの歌や「キラキラ星」、「マクドナルドおじさん」などよく知っているメロディが繰り返し使われていて、「今日は何のメロディだろう」と楽しみに聴いている生徒の様子があった。

ただ、お話に使用した絵本は大型テレビにも映して見せたが、30 人のクラスで使うには小さく、生徒全員に見える工夫が必要であった。また、歌は１回だけでなく何回か聞かせるとより効果が出るのではないかと感じた。

（２）手がかり単語カード

子どもたちは、１枚のカードを文字の書いてある表面を見ながら、「音➔手がかり単語➔音」と読んでいく。手がかり単語は、ジョリーフォニックスや音の導入で出てくる単語、小学校外国語活動で学んだようななじみのある単語、教科書に出てきて覚えておくとよい単語などの中からイラストで表せる語を選んで作った。そのため、手がかり単語の読み練習はリズムよく読み進め、スムーズに覚えていくことができた。音を思い出すのが難しく間違った時は、めくり役の生徒が手がかり単語を見せて教える様子が見られた。生徒からヘルプを求められた時のみ教員が支援した。

（３）ペア学習（手がかり単語カード読み練習）

手がかり単語カードの読み練習を、ペア活動として毎時間行うことで、子どもへの定着が早く、音も正確に覚えられた（B、C 組）。学習が進むとカードの枚数が増えてくるが、目標タイムを設定したことで、タイムを意識して意欲的に取り組むことができた。手がかり単語を忘れたときは、めくり役の生徒が裏面を見せることで読み練習をテンポよくスムーズにできるようにした（写真１）。確実にすべてのカードを練習できたことは、英語が苦手な生徒にとって文字と音の定着に大切なことであった。

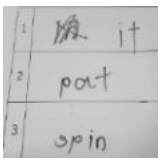
写真１ 手がかり単語カードの読み練習

ジョリーフォニックスを中心に行った A、D 組は、手がかり単語カードの読み練習の機会が B、C 組より少なくなるため、短時間学習の始めに行う音の復習を、手がかり単語カードで行った。一斉でのリピート練習ではあるが、生徒たちは興味をもって大きな声で発音し、つづりと音を定着させるために役立った。

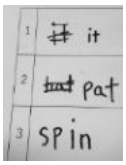
（４）書くことについて

第１グループ（ s, a, t, i, p, n）の学習が終わった後、書き取り（セグメンティンング）練習を行った。①it、②pat、③spin の３問を出題した。２回単語を言った後、音素に分けて発音した。単語の聞き取りの段階で、意味のある単語として理解し、書ける生徒がほとんどであった。間違えた生徒も、音素に分けた音を聞いて正しく直せていた。「ｓ」の大きさや「ｐ」の位置を見ると、１年生の２学期初めの段階ではまだ４線が必要な生徒が多い（図５）。

全て正解している



始め in と書いたが間違いに気づき直している



1番は正しく書けていたが、書き直している。2番は、hat から pat に直すことができた。

図５　書き取り練習の結果から

さらに、「書くこと」について本研究が進むうちに生徒に次のような変化が見られた。生徒がワークブックの問題を解いていて、分からない単語のつづりを質問してきた時、以前であれば、つづりをアルファベットの名前読みで教えると、「e」を「i」と書いたり、「ｒ」を「a」や「o」と書いたり、分からないという表情をして書かなかったりしたので、「アール」と日本語の発音で伝えたりしていた。また、「ｂ」と「ｄ」や「ｌ」「m」「ｎ」、「ｂ」と「ｖ」、「ｇ」「ｚ」などアルファベット順に書くと間違えないが、単語のつづりの中で、名前読みで言うと混乱して間違えることが多かった。だが、アルファベットの音で教えると、迷うことなくすんなり書き、すぐに書けない時も「e」を「/e/, egg, /e/」や「ｒ」を「/r/, rabbit, /r/」などのように、手がかり単語を言うと、迷うことなく書くことができるようになった。これは今後、自分で英単語をつづるときの力につながると考えられる。

（５）ダイグラフについて

小学校での外国語活動で学習するアルファベット 26 文字については慣れているが、２文字で１音を表すダイグラフの定着には時間がかかる。ジョリーフォニックスでは第４グループで初めて「ai」（音は/ei/）が出てくる。日本語の音で読むと「エ・イ」のように２音になるが、英語では「エィ」で１音になることを説明した後、文字を見ながら何回も声に出すことでダイグラフに慣れさせた。

ダイグラフの中で「oo」の短い/u/と長い/u:/のように同じつづりで２種類の読み方、かつ見かけとは全然違う読み方をする音を学び、「書き」の点でつづりを覚える助けになったと感じた生徒がいた。また、「th」のように日本語にない音を学習した後、「Thursday」や「Thank you.」などの単語について発音がより英語らしくなった。

（６）母音の学習

短時間学習で母音となるアルファベットの５つの文字と音を学習した後、短母音をまとめて復習した。母音の文字は日本語と同じ「a,i,u,e,o」（あいうえお）であるが、日本語とは違うことを意識させるため、アルファベット順の「a,e,i,o,u」とし、既習の音で読みの練習をした（図６）。「u」を「ア」と読むことを定着させるためには繰り返しの学習が必要であった。長母音（アルファベットの名前読み）は、基本の 42 音の「ai,ee,ie,oa,ue」を学んだ後と「マジック-e」の学習の時に指導した（図７）。

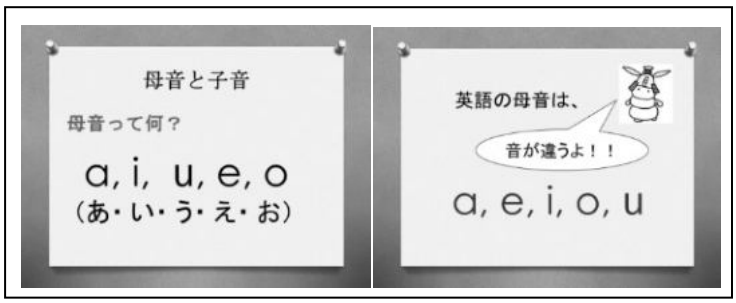


図６　基本の５つの母音

図７　マジック-e の指導

（７）個別の補充学習

１つ１つの音をしっかり覚えても、１つ１つの音をつなげるためには練習が必要である。特に、「子音＋母音」をブレンディングすることが難しい生徒が多い。オンセット・ライムの指導で子音と母音を切り離す練習や、「子音＋母音＋子音」のブレンディング練習を行ったが、一斉指導だけでは定着が難しいと考え、昼休みを使って補充学習を行った。ALT 来校日には ALT の助けも借り、少人数でよりきめ細かい指導を行うことができた。補充学習に回数を重ねて参加できた生徒は、個別に１つ１つの音からつなげていく練習が可能であったので、ブレンディングのコツを学び、初めての単語でも自信をもって、読めるようになっていった（写真２）。

写真２　補充学習の様子

また、補充学習の時、生徒同士や教員、ALT と初級レベルの絵本を楽しそうに読む姿が見られた。例えば、学んだ文字（音）を思い出して、「trunk」「branch」など初めて見る語を読み、木の「幹」「枝」など写真を見て英語の意味を理解することができた（多聴多読マガジン 12 月号、2011. pp. 12-13）。

レベル別リーダーはいろいろな出版社から発行されているが、初級レベルは長くても 16 ページ程度で、同じ表現が繰り返し使われるなどパターンが決まっており、子どもが「自分で読めた」という実感が持てるため、フォニックス学習や英語学習の進度に合わせてこのような本を自分で読む（読み切る）経験は大切だと感じた。

個別の補充学習は、少人数で行えるよう日によってクラスを指定して行った。実施日数は 19 日で、参加は１名のみの日もあれば、多いときは 10 人以上で、延べ参加人数は、113 人であった（表１）。

参加回数（回）	人数（人）	学習回数（延べ人数）
7	2	14
6	1	6
5	2	10
4	7	28
3	6	18
2	7	14
1	23	23
合計	48	113

表１　個別の補充学習への参加

個別の補充学習に参加した生徒の感想は次の通りである。（　）内の数は参加回数。

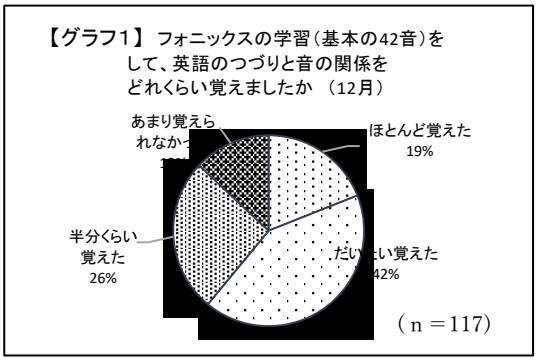
- いろいろな難易度の単語があってよかった。（１）
- 単語をどう読むかなど、先生に教えてもらいながらすることができた。（１）
- まだ習っていない単語も読めて楽しかった。（２）
- 意外と楽しかった。読む力がつくと思った。（２）
- 楽しかった。単語の音がもっと分かった。分かっている人に追いつけた。（３）
- 分からないところは、友だちと一緒に読んでいったのですごく楽しかった。（３）
- もうちょっと時間があればやりたいです。（４）
- 何回も読むにつれてだんだんと分かってきてすごく役に立ったと思います。（６）

これらの他にも、「本当は参加したかったけど、係の仕事や委員会で行けなかったので残念だった」という声もあった。

２　アンケート調査から

（１）フォニックスの学習について

【グラフ１】事後アンケートの「フォニックスの学習で基本の 42 音をどれくらい覚えたか」という項目では、「ほとんど覚えた」と「だいたい覚えた」を合わせると 61％であった。短時間学習で生徒の実感として６割ほどの生徒が「基本の 42 音」を覚えたと感じている。

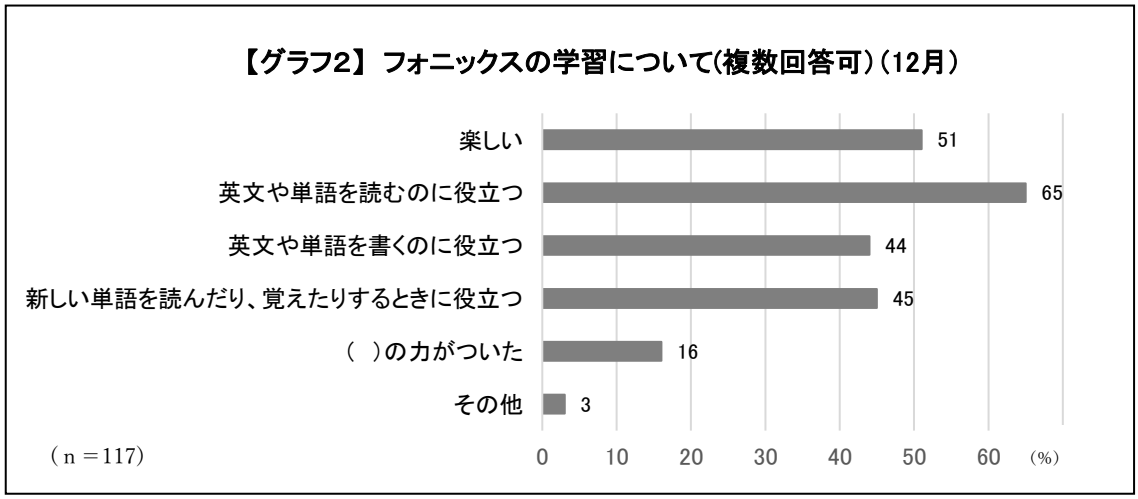


「半分ぐらい覚えた」という生徒については、読み練習の機会を増やしたり、補充学習への参加を促したりすることで、「基本の 42 音」の定着ができると考える。「あまり覚えられなかった」という 13％の生徒についてはどのような点でつまずきがあったのかを細かく調査し、個々に応じた指導・支援をすることが必要である。

【グラフ２】フォニックスの学習についての項目では、「英文や単語を読むのに役立つ」と答えた生徒が 65％と最も多く、フォニックスの学習が「楽しい」という生徒は 51％であった。授業後に「（初めて見た単語を）こうかなと読んでみたら当たっていた」と嬉しそうに報告してくれた生徒もおり、フォニックスの学習は生徒の英語

を「読む」力や「読もうとする」態度につながっていると考えられる。

また、「(　　) の力がついた」という項目の (　　) 内には、「読む (発音する)」力、「書く」力がついたという生徒が多かったが、「聞く」力がついたという生徒が３人いた。個々の音を正確に学ぶことによって、今までよりクリアに英語が聞こえるようになったと考えられる。さらに、「暗記する」力をあげている生徒もおり、フォニックスの学習は単語のつづりを覚える十分な助けとなったことが考えられる。



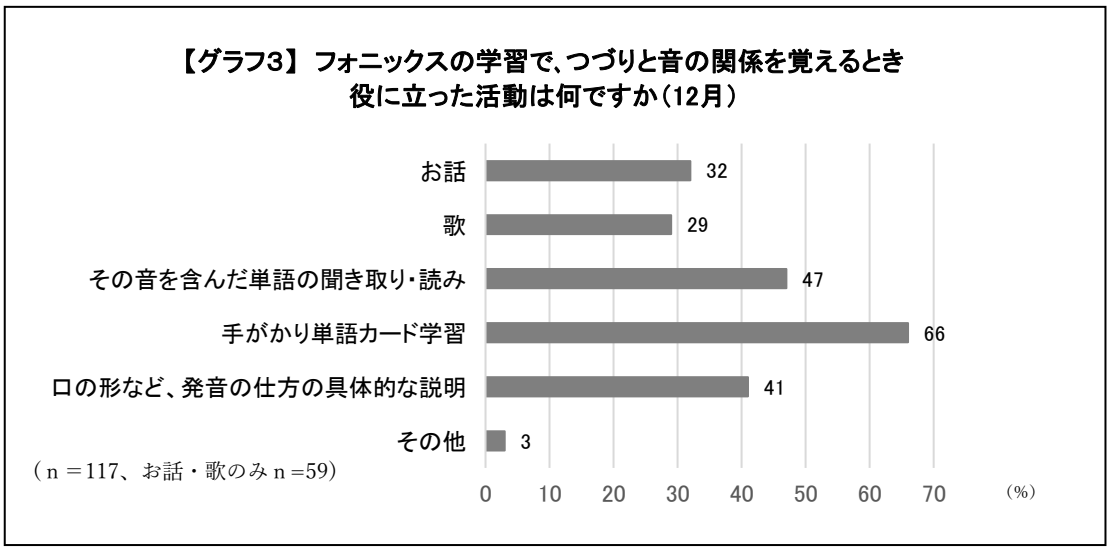
【グラフ３】「フォニックスの学習で、つづりと音の関係を覚えるときに役に立った活動は何ですか」という項目では、「手がかり単語カード学習」を 66%の生徒が挙げており、最も多かった。理由には次のようなことが考えられる。

１　リズムよく音と手がかり単語を言うので楽しく取り組める。

２　手がかり単語が覚えやすく印象に残るものであった。

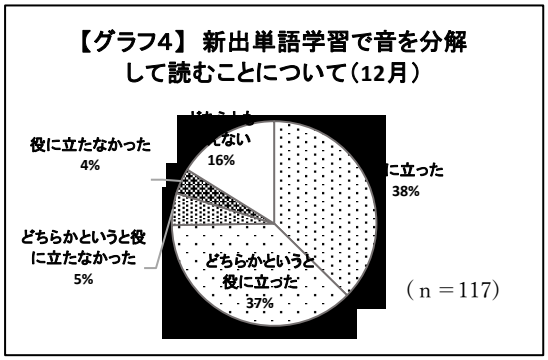
３　ペアで協力して行う活動でタイムなど目標をもって取り組める。

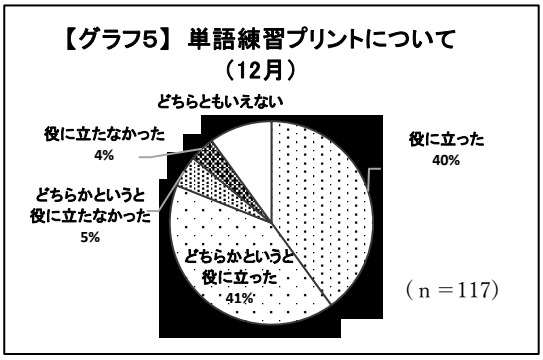
「その音を含んだ単語の聞き取り・読み」は２番目に多く 47%であった。学習した音が含まれている単語数個を聞き取り、その音が単語のどの位置 (前・真ん中・後ろ) にあるかを確認し、続いてリピートで読み練習をした。生徒がよく知っている身近な単語や教科書で習った単語を活用したことが、生徒の文字と音の一致に役立っ



たと考えられる。また「口の形など、発音の仕方の具体的な説明」も 41%の生徒が役に立ったと答えている。喉を触って、/f/と/v/を比べて「有声音」か「無声音」か確認したり、/th/など日本語にない英語の音を口の形にも注意して発音したりすることは、生徒にとって英語の音に興味を持ち、英語らしい発音を意識する機会になったと考えられる。

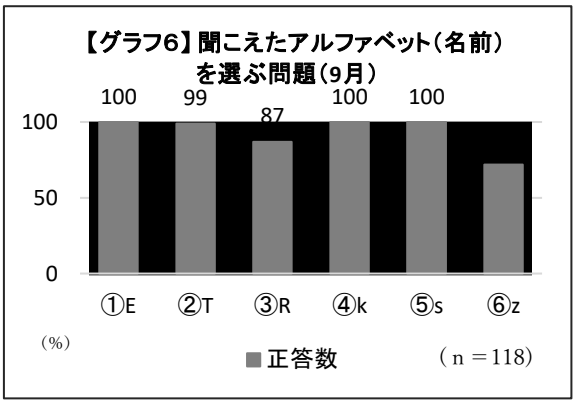
【グラフ４、５】教科書の新出単語の学習で行った「新出単語の音を分解して読む」活動と単語練習プリント（宿題）についても質問した。「音を分解して読むこと」について、「役に立った」「どちらかというと役に立った」という生徒は 75%であった。新しいページに出てくる新出単語は、平均して 10 語前後ある。単語を音素に分けて読む、分けた音をつなげて読む訓練は、まだ英語の音韻意識が定着していない生徒にとって、単語を読んだり、覚えたりするのに役立ったと考えられる。また、「単語練習プリント」については、81%の生徒が役に立ったと答えている。単語練習プリントは、文字と音を一致させながらつづることができるように、1 回目のなぞり書きは音素（又は音節）に分解し、２回目のなぞり書きは単語のかたまりで、３回目は自分で書く、というようにステップを踏ませたので、つづりがより覚えやすかったと考えられる。





（２） フォニックスに関わる音とつづりのチェック

【グラフ６】事前調査では、アルファベットの定着をみるため、アルファベットの聞き取り（名前読み）と書き取りを行った。アルファベット（名前読み）の聞き取りは全体的によくできていた。「R」は「O」、「A」と間違える生徒がいた。「O」の名前読みをする時、「オゥ」ではなく日本語の発音で「オー」と読んでいることや、「A」の音読みと混同しているということが間違いの原因として考えられる。また、「ｚ」は「ｇ」と間違える生徒が多く、日本語にはない英語の音の違いを聞き取ることが難しいことが分かった。

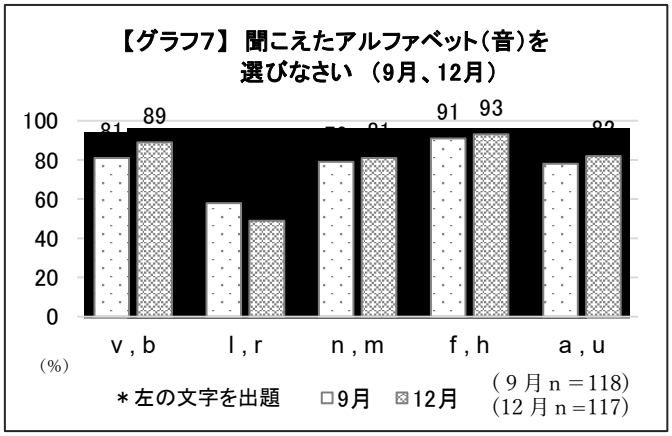


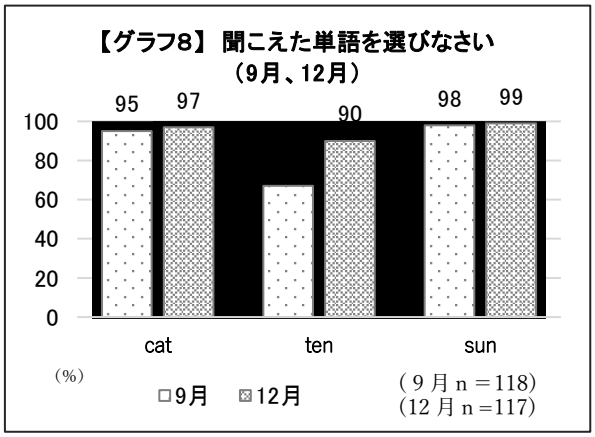
アルファベットの書き取りは、アルファベット順穴埋め式で大文字・小文字の両方

を行った。アルファベット順であれば、ほとんどの生徒が正確に書けていた。書き間違いがあったのは、小文字で、「ｊ」の向きや位置であった。これはひらがなの「し」と混同してどちらか分からなくなってしまうからだと思われる。また、文字の向きに関しては「ｂ」、「ｄ」はよくできていたが、「ｐ」、「ｑ」を間違えている生徒がいた。「ｂ」、「ｄ」はアルファベット順では前の方に位置しており注意して書くことができるが、「ｐ」、「ｑ」は後半に出てくるので定着するのが遅いのではないかと考えられる。さらに、アルファベット順であれば、「ｂ」、「ｄ」の向きを間違えないが、授業やテストで単語の中でとっさに使う時は、書き間違える生徒がいる。似ている文字の定着には時間がかかると考えられる。

アルファベットの文字指導の中で、基本の書き順を確認する時、例えば、手がかりとなる単語で、「ｂ」は「bat（バット)」と「ball（ボール)」を、「ｄ」は「drum（ドラム)」を扱い、「ｄ」の縦棒はドラムスティックをイメージさせ、それを書き順と結び付けて指導することで文字の形と音の定着を図ることができる。また、ジョリーフォニックスでは、つづりと音を優先しているため、アルファベット 26 文字の中で「ｑ」のみ単独ではなく「qu」で教えられる。「ｑ」は必ず「u」とセットでつづられることを知っていると「ｐ」、「ｑ」の混同はなくなると考えられる。

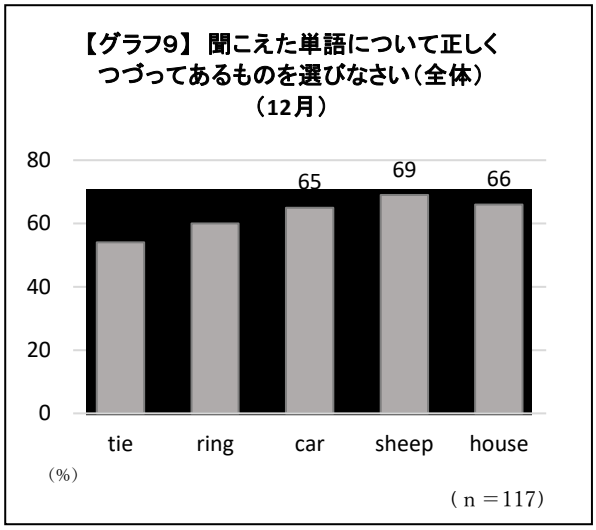
【グラフ７】アルファベット（音読み）の聞き取りは、事前、事後の両方行った。単語に含まれる音ではなく、その音だけを聞き取るため、生徒にとっては大変難しいが、「ｒ」と「ｌ」を除く、すべての問題で正答率は上がった。「ｒ」と「ｌ」、「a」と「u」の音の区別については、フォニックスの第３グループの学習を終えた後に、大型テレビやプリントを利用して、口の形、音の違いの聞き取り練習を行った。その時は分かっていたが時間が経つと忘れてしまっていたり、違うことは分かるが、定着しておらず、どちらがどの音であったか迷ったりしたことが、誤答が増えた原因ではないかと考える。「ｒ」と「ｌ」に比べて、「a」と「u」の聞き取りの正答数が上がったのは、母音の指導を繰り返し行ったためだと考えられる。単語指導の時などの機会を捉え、繰り返し指導していくことで、日本語にない音や区別することが難しい音の定着を図るようにしたい。



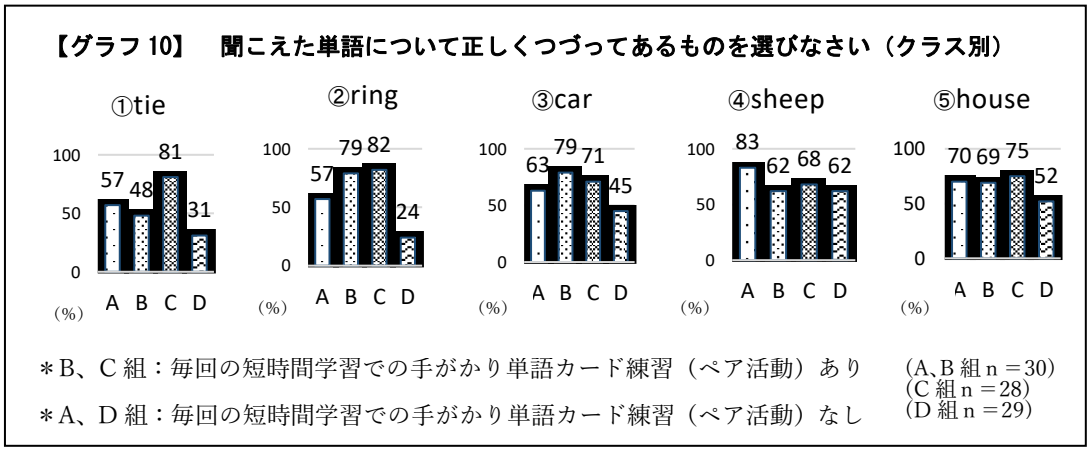


【グラフ８】単語の聞き取りでは、９月 は「ten」を「pen」とする誤答が多く、子音の聞き取りの難しさを確認したが、フォニックスの学習の後、正答率が格段に上がった。「ｔ」、「ｐ」の破裂音は教室の後ろまで届きにくいが、12 月の事後チェックでは、口の形を見ながら注意深く聞いている生徒が多く、「t」と「p」の口の形や音の違いを理解し解答できたことが、正答数の向上につながったのではないかと考えられる。

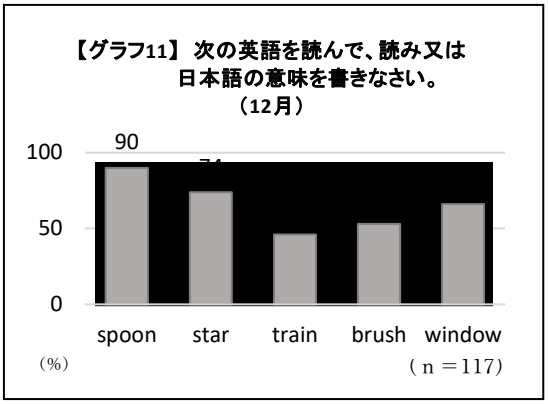
【グラフ９】ダイグラフの定着をみる聞き取り問題では、sheep の定着がよかった。「house」の正答率は 66%、「tie」の正答率は 54%であった。「house」と、最も正答率の低かった「tie」は、「hause」(30%)、「tai」(41%) という誤答を選んでいる生徒が多かった。これは、「ou」、「ie」といったダイグラフのつづりと音の定着が十分ではなく、ローマ字風に読めるものを選んでいると考えられる。また、語尾にくる「ng」の音の聞き取りが難しく、「rin」を選ぶ誤答が 30%あった。



【グラフ 10】この問題で出題した単語は、すべて手がかり単語である。クラス別でみると毎回の授業でペアの読み練習を行った２クラス（B 組、C 組）は正答率が高かった。このことから、手元のカードでつづりを見ながらペア活動で読みの練習をすることは有効であると考えられる。しかし、ペア練習の少なかったクラスのうち A 組において、④sheep は 83%と最も正答率が高く、①tie も 57%であったのは、昼休みの補充学習に複数回参加する生徒が多く一定の定着がみられたのではないかと思われる。



【グラフ 11】単語の読みの項目では、train は「トライン」、brush は「ブルッシュ」「ブルーシュ」という誤答が多く、母音である「ai」「u」の正しい音と文字の一致ができていないことが分かった。また、「train」は普段よく使う「rain」の頭に「t」が付け加わったものである。誤答としてそのまま「レイン」「雨」と書いているものもあった。star の誤答として、「ストア」、「店」が多かった。これは１つ１つの音を読むと「ス・トゥ・アー」となり、このような誤答があることが推測される。生徒としては、１音１音は読めているが、それをブレンディングする力が必要であると考えられる。昼休みの補充学習で、「子音＋母音」のブレンディングに難しさを感じていて、自然につなげられない生徒がいた。練習を積み重ねることでできるようになっていくが、生徒によっては個別指導が必要であることが分かった。



また、この問題では無解答が、①spoon ５％、②star 13％、③train 31％、④brush 26％、⑤winter 21％であった。誤答をみると単語の１部の音が読めているものばかりである。無解答の生徒も全く読めていないのではなく、１対１の面接式の読みテストであれば、読もうとする姿が見られ、無解答率は減ることが予想される。やはりこのことからも丁寧な個別の指導やチェックが必要であると考える。

Ⅴ　研究のまとめ

本研究では、「読むこと」「書くこと」が苦手な生徒への英語指導として、短時間学習を使い、フォニックス指導を市内中学校１年生に対して行った。今回フォニックスの指導として２クラスずつ２種類の文字と音の指導を行った。ジョリーフォニックスは、「お話」に合わせたアクションを用いるなど「聞く」「話す」「読む」「書く」以外の多感覚を使った指導を行うため、印象深く文字と音の関係を学習することができた。「今日はどんなお話だろう」と話を熱心に聞く生徒や歌を楽しみにしている生徒など、それぞれの生徒が興味をもって学習に取り組むことができた。LD 児の英語指導（手がかり単語カード学習）は、学習するごとにカードが増えていくため、繰り返し練習し、文字の音を忘れてもその都度カード裏面の手がかり単語で音を確認して、自然に文字と音の関係を身に付けていくことができた。また、手がかり単語学習はペアで行うため、仲間同士で教え合ったり、目標タイムを達成するために協力したりするなど、活発に取り組むことができた。どちらの指導法も、文字と音の関係を学ぶという点で、効果的な学習法であると考える。このことは、事後のチェックテストをクラス別に見た時、ダイグラフの定着を見る項目では、手がかり単語カードの単語を調査に使ったため、手がかり単語カード学習を中心に行ったクラスと行わなかったクラスで差があったものの、それ以外の項目では大きな差は見られなかったことから分かる。つまり、クラス間の学力差が影響しておらず、これらの指導は、英語の基本の「読み」「書き」を指導する手法として、英語を苦

手とする生徒に有効であると言えるだろう。本研究で行った２つの指導法をより効果的に指導できるように、一連の指導の流れを工夫して、短時間学習に組み込むことが今後の課題である。

また、今回の研究では一定の期間で「基本の 42 音」を指導するため１回に２文字ずつ導入したので、短時間学習内でのブレンディング（読み）、セグメンティング（書き）の指導が十分ではなかった。１つ１つの音が読めても、それをブレンドする（つなげて読む）ことが難しい生徒は、特に子音と母音をブレンディングすることが難しいということが分かったので、オンセット・ライムの指導や音韻指導を取り入れることが必要である。音韻意識を高め、文字と音を覚えた上で、ブレンディング、セグメンティングの練習を行うことが、実際の「読み」「書き」につながっていくと考えられる。

短時間学習での学びを定着させる手立てとして昼休みに行った補充学習は、個別の支援の必要な生徒にとって、自分のペースで繰り返し学習できる機会で、自分で単語や英文を読めたという実感を味わうことができ、英語の授業で発音をするときの自信につながった。しかし、それを行うには時間や場所などの制約があるため、一斉指導において、「読むこと」「書くこと」が苦手な生徒に対するよりよい指導方法の工夫・改善を重ねていくことが今後の課題である。

また、英語の難しさがどこにあるのかは生徒によって異なる。個々の生徒が文字と音の関係と英語の音韻についてきちんと理解し、ブレンディングができているかどうかを教員が定期的にチェックしたり、「振り返りシート」を使って、生徒自身でチェックする機会をもたせたりするなど指導の工夫が必要である。生徒一人一人のつまずきを把握した上で、ディスレクシアの疑いがあるなど一斉の授業の中で理解や定着が難しい生徒に対して、個別学習で適切な指導を行えば、「読むこと」「書くこと」の力を付けていくことができる。

文字と音の指導はステップを踏んで、繰り返し学習することが大切で、英語の単語や文が「読める」「書ける」という自信が、英語への興味・関心や将来の自分のために英語の勉強を「大切にしたい」という気持ちにつながると考える。今後も、中学校英語入門期の文字と音の指導方法についてさらに研究を深め、実践につなげていきたい。

最後になりましたが、本研究に当たり、お忙しい中、ご指導・ご協力いただきました久居西中学校の校長先生をはじめ教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

Ⅵ　引用・参考文献

引用文献

○加藤醇子『ディスレクシア入門』日本評論社　(2016)

○M. コームリー（編）熊谷恵子（監訳）『LD 児の英語指導（ヒッキ―の多感覚学習法）』北大路書房　(2005)

○ジョリーラーニング社（著）山下桂世子（翻訳）『はじめてのジョリーフォニックス―ティーチャーズブック―』東京書籍　(2017)

○ジョリーラーニング社（著）山下桂世子（翻訳）『はじめてのジョリーフォニックス―ステューデントブック―』東京書籍　(2017)

○『多聴多読マガジン 12 月号』コスモピア株式会社 (2011)
○鄭京淑（執筆）「発音・音声の指導：中学校での実践」（吉田晴世・加賀田哲也・泉惠美子編著『新時代の学びを創る 10 英語科・外国語活動の理論と実践』６章４より）あいり出版 (2015)
○『NEW HORIZON English Course 1』東京書籍 (2016)
○ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」 (2014)
http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356(2018.1.10)
○ベネッセ教育総合研究所「中高の英語指導に関する実態調査 2015」 (2016)
http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4776 (2018.1.10)
○山下桂世子「ジョリーフォニックス総合トレーニング」資料 (2017 夏：８月名古屋)

参考文献

○河野俊寛『読み書き障害のある子どもへのサポート』読書工房 (2012)
○サリー・シェイウィッツ『読み書き障害(ディスレクシア)のすべて』PHP (2006)
○品川裕香『怠けてなんかいない！ディスレクシア読む・書く・記憶するのが困難な LD の子どもたち』岩崎書店 (2003)
○瀧沢広人『英語授業のユニバーサルデザイン　つまずきを支援する指導＆教材アイデア５０』明治図書 (2013)
○田中真紀子『小学生に英語の読み書きをどう教えたらよいか』研究社 (2017)
○津市教育委員会「津市版授業改善マニュアル」 (2016)
○松香洋子『アメリカの子供が「英語を覚える」101 の法則』講談社 (2000)
○村上加代子「日本の英語教育におけるディスレクシア生徒に関する一考察」
神戸山手短期大学紀要第 55 号 pp.67-76 (2012)
http://www.kobe-mate.ac.jp/library/journal/pdf/college/kiyo55/55murakami.pdf
(2018.1.10)
○村上加代子「英語の学習初期における読み書き指導の在り方の検討―基礎的な力としてのデコーディングと音韻意識スキル獲得の必要性について―」
神戸山手短期大学紀要第 58 号 pp.57-74 (2015)
https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=129604 (2018.1.10)
○文部科学省「小学校学習指導要領」 (平成 29 年３月告示)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf
○文部科学省「中学校学習指導要領」 (平成 29 年３月告示)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf
○文部科学省「中学校学習指導要領」 (平成 20 年３月告示)
○山下桂世子「多感覚を用いたシンセティックフォニックスと特別支援教育」
(2015 年５月広島大学学習システム促進研究センター講演資料)
http://kayokoyamashita.com/wpcontent/uploads/9152a68ecc74bc5474f90f67b6fd70d6.pdf (2018.1.10)
○湯澤美紀・湯澤正通・山下桂世子編著『ワーキングメモリと英語入門』北大路書房(2017)

Ⅶ　資料

単語練習プリント（Unit7 Part1）

英単語練習プリント　Unit 7－1　　Class:　Number:　Name:

	①声に出して言ちう。	②なぞり書き（声に出しながら練習しよう。）（分解）		③声に出しながら、練習しよう。	④Challenge!　（テスト前にやるといいね！） 本誌でプリントを折り、本体を見て書こう。	
1	who だれ	wh o フ　ー	who フー	_____	だれ	_____
2	girl 女の子	g ir l グ ア ル	girl ガール	_____	女の子	_____
3	boy 男の子	b oy ブ　オイ	boy ボイ	_____	男の子	_____
4	daughter 娘	d au gh t er ド　ホー　×　ト　ァー	daughter ドータ	_____	娘	_____
5	son 息子	s o n ス ア ン	son サン	_____	息子	_____
6	cute かわいい	c u te ク ュ　ト	cute キュート	_____	かわいい	_____
7	old …歳の、古い	o l d オ ル ド	old オゥルド	_____	…歳の、古い	_____
8	junior 年下の	ju ni or ジュ　ニ　ァ	junior ジュニア	_____	年下の	_____
9	high 高い	h i gh ハ イ　×	high ハイ	_____	高い	_____
10	year(s) 年	y ear イ　ア	year イヤー	_____	年	_____
11	junior high school 中学校	junior high school ジュニア　ハイ　スクール	junior high school	_____	中学校	_____